機能論的アプローチへのメモ

デジタル時代の書記とは蓄蔵された情報の２次元矩形平面へのダイナミックな配置である

Albertine Gaur, a great researcher in British Library for Indic script, once wrote that “writing is storage of information”.

※A History of Writing(the British Museum, 1984, 1992

※日本語訳として「文字の歴史—起源から現代まで」矢島文夫他訳,

1987があるが、そもそも書名としてアウト。小松英雄も、この日本語訳を、下記の書物で、痛烈に批判している。

小松英雄は、これを、「書記とは情報の蓄蔵である」と訳した。

※「日本語書記史原論補訂版」2006

Gaurも小松も、言語を対象とする研究者である。故に、彼らにとってのinformation/情報とは、（広い意味での）言語そのものであろう。

しかし、JLreq-dが対象とする情報は、（広い意味での）言語のみならず、従来の書物を構成してきた、図版(figure)、図表(table)、画像(photo, illustration)も含まれる。

Gaur/小松の謂を、この章の文脈でparaphraseすると、JLreq-dが対象とするのは、文字とその他の視覚的情報要素を、２次元の矩形平面にダイナミックに配置することとなる。

今ここで気付いたこと。

Gaur/小松にとってのwriting/書記とは、それが書かれた時点で２次元のstrageとして視覚的に固定化されるが、JLreq-dにおいては、情報が視覚的に２次元の矩形平面に立ち現れるのは、それが読まれる瞬間であり、読まれた後は、消え去ってしまう。

JLreq-dにとってのwriting systemとは、蓄蔵された情報をdynamicに２次元の矩形空間に配置することにほかならない。

では、2次元の矩形空間に配置される対象となる情報とは何か。

さまざまな考え方があろうが、ここでは、有向グラフ(directed graph)で接続された文字の列とその他の視覚要素のネットワークであるとする。

XMLなどの高層化文書と有向グラフによるネットワーク構造の関係（⇒村田さん？）

文字の列以外の視覚要素は、図(figure)と表(table)に分けられる。（⇒本当？敏さん）

文字の列は、（章、節、項などに）階層化され、一意に線形化可能な構造を持つ本文（⇒これでいいの？村田さん）と、本文とリンクされたその他の文字の列とに分けられる。

本文以外の文字の列は、注釈(annotation)か参照(reference)である。（⇒本当？敏さん）

本文と他の情報要素との対応関係

情報要素は通常、本文の一部との対応関係を持つ。対応関係は、本文全体の場合から、章、節、項、さらには、文節、語、字に至るまで、さまざまである。

また、２次元矩形への配置に当たっては、本文と他の情報要素との結びつきの強度を考慮する必要がある。強い⇔弱い、近い⇔遠い、など。

本文を含む情報要素から構成されるネットワークをダイナミックに２次元矩形に配置する方法は、一意ではない。

例えば、いわゆるルビが、親文字の読みを示すためのannotationであるルビの場合、従来のルビ文字を使い親文字の右側に配置する方法の他に、新聞などでしばしば見られるように、パーレンで囲って、親文字の後に配置する方法や、マウスオーバーで吹き出しとともにダイナミックに表示する方法、また、２次元矩形への表示を越えて、音声で表現する方法なども考えられる。

他方、いわゆるルビがある種のinterlinear annotationの場合、本文との結びつきの強さや文字数によっては、頭注や脚注に移す方法もありうる。

従来のJLreqやJIS組版規則(JIS X 4051)では、物理的な紙の制約（もしく固定化された２次元矩形空間）の下での配置の慣習を踏襲することを目指してきたが、JLreq-dにおいては、必ずしも従来の慣習を踏襲する必要はない。

すなわち、ネットワーク構造を持つ蓄蔵された情報を、ダイナミックに２次元矩形空間に配置するには、どのような方法が最も適切であるか、を考慮することが大切なのである。

本章で示す機能論的アプローチとは、ネットワーク構造として蓄蔵された対象情報をどのように２次元矩形空間に配置するのが最も効果的かを、ダイナミックに考慮する立場のことである。

有向グラフのラベル付けによる自動処理

有向グラフのラベルには弧の長さなどを付ける場合がある。JLreq-dの文脈では、本文と注釈や参照の関係性の強さを示すためにも使うことが出来る。

また、先に挙げたルビを例に取ると、ルビが果たしている機能的役割（読み、注釈など）を、有向グラフのラベルとして付加することも可能である。

JLreq-dにおける機能分析とは、本文とその他の要素を繋ぐ有向グラフに、機能を示すラベルを付加することと言い換えることが出来る。

さらに、機能が異なれば、それぞれのグラフ構造の２次元矩形空間への写像方法も異なって当然である。

LJreq-dにおける機能論的立場を、有向グラフのラベル付けという観点から言い換えると、ある有向グラフの２次元矩形空間への写像方法は一意ではなく、その機能に即して異なる視覚的表現を許容するものである、と言い換えることが出来る。

再びルビを例に取ると、ルビが親文字の読みを表している場合（ラベルが読み）は、マウスオーバー時の音声変換、親文字群に対する語釈を表しており一定以上の長さを盛っている場合（ラベルが語釈）は、頭注として表現する、など、多様な対応を許す、という立場となる。

しかし、一般には、２次元矩形空間への写像対象となる情報（プラトン的にはイデア、ここでは仮にウアテキスト群と呼ぶ）に機能的ラベル付けがなされていることは稀である。また、ウアテキスト群の２次元矩形空間へのダイナミックな写像生成は、通常、browser等のアプリケーションによって機械的になされるものであり、この局面で機能論的な推論を行うことは、意味的解釈すなわち情報受容者側の《読みの行為》への侵犯となる可能性を持つ。

将来への課題として、現在、２次元矩形空間への固定的な配置指示として行われている「組版指定」（通常は、編集者＝最初の読者によって行われる）を、著者と編集者の共同作業による、機能論的ラベル付けに置き換え、２次元矩形空間へのダイナミックな写像作業は、読み手側での半自動処理に委ねる、という方策についても検討する必要があろう。

敏さんによる注釈の機能分析

1　言葉，事項の説明

1.1　言葉そのものの説明

＊古典ものや漢文での語句の解釈だけでなく，すこし以前の文学作品（例えば，谷崎潤一郎）などで，若い人向けに注を付けている例をよくみかけます．新潮文庫などでは，巻末に後注で示す例が多いが，最近は，縦組の本で見開き単位で，その左端に示す傍注が増えてきたように感じている．

＊簡単な場合，その箇所に括弧書きで示してしまう方法もある．

1.2　地名や人名の補足説明

＊地名・人名，特に人名の生年，没年を割注で示す例がある．教科書では行間注で処理する例もある．

1.3　ある用語・言葉などを，別の言語で示す．

＊ある用語を英語等で示す場合，一般に括弧書きで示すが，その言語の読みを片仮名のルビで示す方法もよく見かける．

1.4　略語を正式な綴りで示す

＊この場合も一般に括弧書きで示す例が多い．

1.5　事柄そのものの説明

＊初心者用の経済学等の本では，用語の説明を注記で示している例もある．こうした用語の説明を縦組の書籍で行う場合，脚注で示す例をよく見かける．Webでは，これはポップアップでやるのかな？

1.5　校訂上の問題，文字の異同など

＊漢文，古典ものなどでは，校訂上の問題，文字の異同など，語句の解釈とは別形式の注で示す例をよくみかける．

2　説明事項の典拠

1.1　本文の説明事項の根拠を書籍，雑誌論文等で示す．

＊この場合は，その箇所ごとに注記で典拠を示す方法と，その箇所では“（著者名，刊行年）”で示し，巻末等の参考文献一覧との対応で示す方法とがある．

1.2　本文の説明事項の根拠をWebのURLで示す．

＊この方法は，最近はよく見かけるようになった．

1.3　本文の説明事項の根拠を対話，あるいは取材，その他の方法で，どのように入手したかを示す．

＊ノンフィクションだけでなく，やや学術的な本（社会学）などでも，こうしたことを注記で示す例をたまに見かける．

1.4　典拠を示すだけではなく，そのような理解にいたった調査そのものの経過を説明する．

＊最近，この手の注記が増えているようにも感じている．

1.5　説明事項の根拠だけではなく，それの参考文献を示す．

＊ある事項，例えば，インドのヒンドゥー・ナショナリズムを説明している箇所で，これについて詳しく知りたい場合は，これこれの文献があるよ，といったことを注記で示す．

3　本文の補足

1.1　本文でふれるには，やや枝葉になる議論を注記で示す．

＊藤田省三さんの本のように，本文より注記の方が重要な事項を書いてある例もあるが，……

1.2　古典等で解釈を示す．

＊一般に元のテキストを示し，その後ろに割書きして示す．中国では，儒教の経書の解釈を〈注〉（伝，箋（せん），解，学ともいう），さらに注を詳しく解釈したものを〈疏〉（つまり注の注）とよぶようです．

詳しく解釈したものを〈疏〉（つまり注の注）とよぶようです．

1.3　本文でふれた事項の参考事項を示す．

1.4　経済学関係などの本で，本文では言葉で説明し，注記で数式を用いて証明する．

4　言語の翻訳

4.1　外国語の文を日本語の文に翻訳して示す．

4.2　日本語の古文を現代文に翻訳して示す．

4.3　漢文を読む下し文に，さらに通釈文にして示す．

5　図版と表の注

5.1　図や表の出典を示す．

5.2　事項や数値の補足説明を行う．